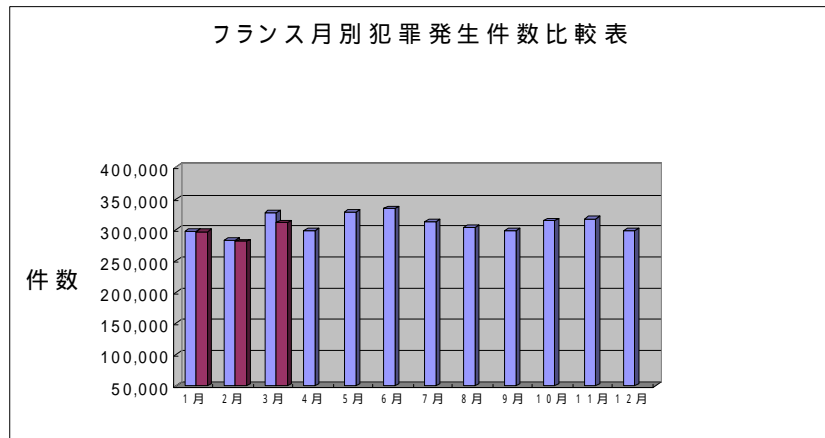


1. フランス国内における犯罪発生件数（2006年約330万件、前年とほぼ同数）  
 （数字については報道に基づき当館にて集計したもの）

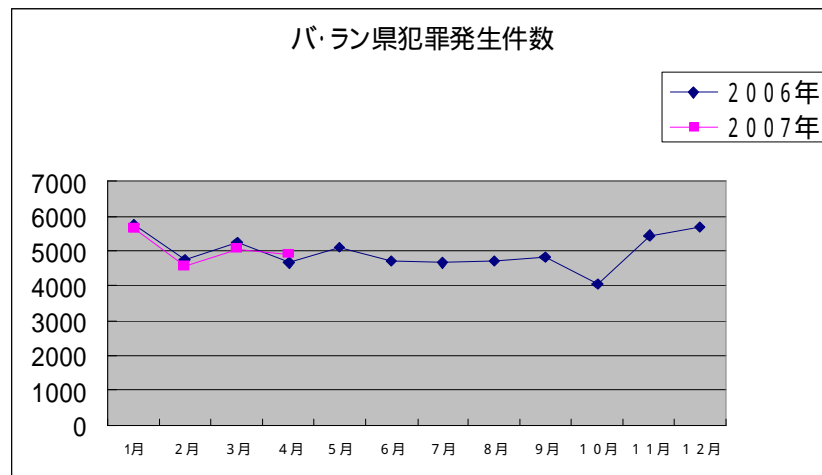


2. 当館管轄内3県犯罪発生件数の推移

(1) バ・ラン県2006年犯罪件数総数は59,548件。2007年4月末現在では20,164件であり昨年同期と比較して200件の減少。特に年末年始に犯罪が増加する傾向にある。

ストラスブール市内の治安機関が定める要警戒地区

ヌーホフ(Neuhof)、オートピエール(Hautepierre)、ヌドルフ(Neudorf)、メノー(Meinau)



(2) オ・ラン県における2006年犯罪件数総数は35,793件。2007年4月末現在では11,790件であり昨年同期と比較して44件の増加。

ミュールーズ市内の治安機関が定める要警戒地区

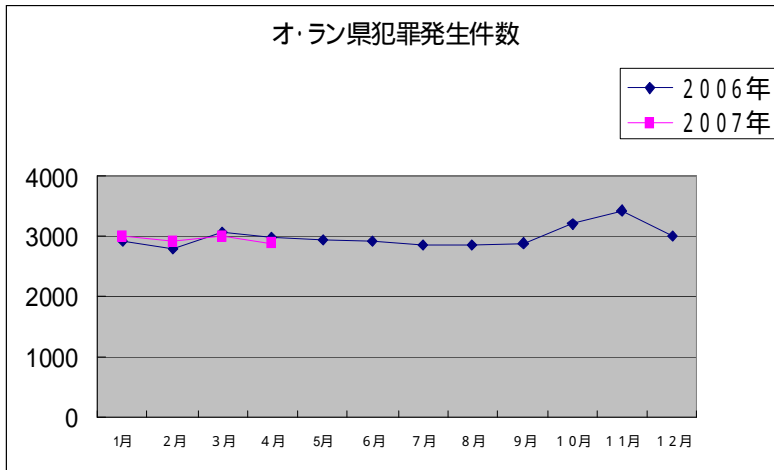
ドリュオ(Drouot)、ブロソレット(Brossolette)、レ・コト(Les Coteaux)

シテ・ワグイナー(Cite Wagner) 地区は2007年に解除されました。

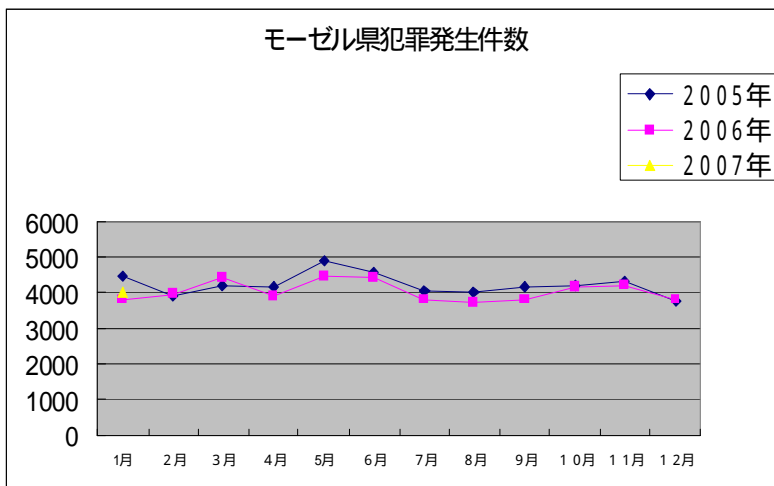
(コルマル市内に治安機関が定める要警戒地区はありません)

\* ミュールーズ市に関する治安当局の見解

当地は一般的に治安が悪化している地域というイメージを持たれているが、実際には犯罪発生率（2002年より2006年の間に約 - 30%）の減少が著しく、人口比率から見てもストラスブルより犯罪は少ない。治安悪化のイメージを持たれる原因としては、移民（2世、3世を含む）が同市の40%を占めていること及び警察の定める要警戒地区が市内中心部にあることが考えられる。

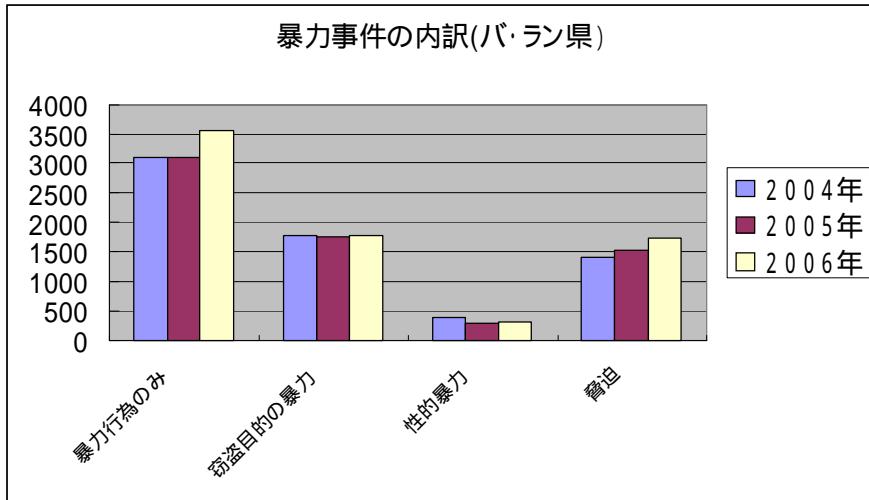


（3）モーゼル県における2006年犯罪件数総数は48,357件。2007年1月末現在では4,010件であり昨年同期と比較して212件の増加。5月、6月のバカンスシーズン前の時期に犯罪が増加する傾向にある。



3. バ・ラン県における2006年における犯罪の傾向として一般犯罪（窃盗等）はほぼ同数であったのに対し、暴力を伴う犯罪及び未成年者による犯罪が増加傾向にあった。

（1）暴力を伴う犯罪の内暴力行為のみを行う事件が2005年と比較して約15%、脅迫事件が約10%の増加。



（2）未成年者の犯罪者は18%の増加であり全犯罪者の約21%を占めており、主な犯罪は窃盗（万引き）及び薬物系の犯罪であった。また、窃盗（万引き）で逮捕された未成年者の内女性の数が69%増加。

4. アルザス地方では年末年始に車が放火される悪習慣があります。2006年年末～2007年年始にかけての車輛放火台数はアルザス地方全体で89台（バ・ラン県で43台、オ・ラン県で46台）（+44台）。ストラスブール市近郊28台（+17台）、ミュールーズ市近郊15台（±0台）、コルマル市近郊15台（+9台）となっております。（台数比較は昨年同期）

5. ナンシー市において5月5日、イスラム過激主義者（アルジェリア系仏人）が「テロの企てと関係を有する犯罪結社」及び「爆発物製造」容疑で身柄を拘束されました。同人は、従来の組織化されたテロリストグループに属することなく、インターネット等を通じてAQMI（「マグリブ諸国におけるアル・カイダ組織」）とコンタクトを取っており、家宅捜索の際に、ガス缶、空の消火器、武器や爆発物の製造方法が記載された文書が発見された。同人の供述によるとルクセンブルグのアメリカ領事館別館、ディユーズにある仏軍精鋭部隊である第13空挺連隊、ムルト・エ・モーゼル県県庁等をテロ攻撃の対象としていたとのことであった。

6. 6月5日～8日までの間、ドイツにおいてG8首脳会議等が開催される予定であり、同会議等開催中の当地における具体的なテロ情報及びデモ情報はありますが、同期間中はドイツとの国境、ストラスブール空港並びにストラスブール中央駅において警備強化が予定されております。

7. 当館では2007年3月にHPを全面改定し、安全情報等在留邦人の皆様に有益な情報を掲載しております。また、当館より「お知らせメール」にて在留邦人の皆様に緊急事態対策及びさまざまな有益な情報を配信しております。5月末日現在で加入登録者数は131名ですが、加入登録がお済みでない方は加入登録をお願いします。加入登録方法は当館HPからも登録できますが、当館領事窓口でも受け付けております。

#### フランス大統領選挙後の集団的破壊行為（注意喚起）

1. フランス大統領選挙結果判明後、サルコジ氏が当選したことに反発して、パリを始めリヨン、ナント、トゥールーズ等国内の複数の都市の中心部等で5月6日夜から7日朝にかけて、多数の若者らによる抗議行動が行われ、警察当局との間で衝突に発展しました。また、数百台の車両が放火され、多数の検挙者を出す事態に至りました。

2. ストラスブール市内においても、6日夜約400人が参加する抗議行動がRepublique広場（ストラスブール市内中心部）で行われ、参加者数名がビール瓶を警察に向けて投げ出す等警察当局との間で衝突に発展し、国家警察保安機動隊（CRS）が出動し細粒ガスを使用するなどして抗議行動を治めたという事案が発生しました。また、8日夜においても同市中心部Homme De Fer広場で約100人が参加する抗議行動が行われました。

同日夜間には車両放火もバ・ラン県で21台（発生場所はストラスブール市西部～南部のHautePierre地区、Cronenbourg地区、Montagne Verte地区、Elsau地区、Neuhof地区）オ・ラン県で9台、モーゼル県（メッサ）で7台、ムルト・エ・モーゼル県（ナンシー）で20台、ドオー県（ブザンソン）で4台が被害にあったと報道されています。

3. 現在は沈静化しているようですが、再燃することも懸念されますので、最新の関連情報の入手に努め、集会、抗議行動が行われている場所や地域には近づかないよう注意してください。

#### 夏の海外旅行安全キャンペーン

外務省では夏の旅行シーズンを前に「夏の海外旅行安全キャンペーン」を実施しており

ます。詳細につきましては以下の外務省HPに掲載されております。

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/pubanzen/campaign.html>

同「夏の海外旅行安全キャンペーン」のなかで、当地在留邦人の皆様に有益と思われる情報を抜粋してご紹介します。

#### <安全な海外旅行のための心得5箇条>

1. 現地の法律を守り、風俗や習慣を尊重すること
2. 危険な場所には近づかないこと、夜間の外出は控えること
3. 多額の現金、貴重品は持ち歩かないこと
4. 見知らぬ人を安易に信用しないこと
5. 薬物には絶対に手を出さないこと

#### <海外安全ホームページ>

旅行に行かれる前に渡航先の情報チェックに活用下さい。

#### <海外邦人事件簿>

日本人が海外で巻き込まれた事件・事故を題材に安全対策のポイントを紹介しています。

#### <海外安全ガイド>

トラブルのケーススタディから学ぶ「クイズ」で、あなたの安全度チェックに活用下さい。

#### <海外安全劇場>

日本人が巻き込まれやすい犯罪の手口などを映像で説明しています。

\*上記<海外邦人事件簿>より、当地でも同様の事件が発生する恐れのあるものをご紹介します。

1. 現金自動引き落とし機(ATM)に潜む罠
2. 連係プレーの列車内泥棒
3. 強盗犯には抵抗しない
4. 置き引きにご用心

#### 1. 現金自動引き落とし機(ATM)に潜む罠

今や国際キャッシュカードは海外旅行者の必須アイテムになっています。国内に預金さえあれば、現金やトラベラーズチェックを持ち歩かなくても、海外で必要に応じて現金が引き出せる、また、旅先で所持金をすべて盗まれて一文無しになるというような危険もないので、海外旅行にはうってつけのものだと思われています。実際、現金を持ち歩くより遙かに危険は少ないと思いますが、数年前からこれらのカードを狙った犯罪も増えています。



『パリに観光旅行した29歳の女性。国際キャッシュカードで現金を引き出そうとシャンゼリゼ通りにある銀行のATMにカードを入れたところ、カードを入れたまま機械が動かなくなった。銀行は既に閉店しており係員も呼べなかったので、念のためカード会社にのみ連絡しておいた。ところが、帰国後に銀行預金残高がほとんど無くなったことに気付きカード会社に確認したところ、カードが出てこなくなって電話連絡をするまでの間に現金が引き出されたことが判明した。被害額約30万円。』

これを犯罪者の側から見てみましょう。

『ATMのカード挿入口に、ごく細い針金で細工をし、利用者が来るのを待ち受ける。利用者はカードを入れるが細工された針金に引っかかりうまく挿入されない。タイミングを見計らって、犯人は親切を装って近付き、「もう一度、暗証番号を入れてみた方がいい」とアドバイスをし、利用者が入力した暗証番号をチェックする。暗証番号を再入力しても当然機械は作動せず、カードも出てこないの、利用者は機械にカードが吸い込まれてしまったものと諦め、立ち去ってしまう。その後、犯人はカード挿入口の「仕掛け（針金）」を引き上げてカードを入手し、覚えた暗証番号で現金約30万円を引き出した。』

日本国内でも、過去にキャッシュカードにからんだ犯罪が起きていますので、海外が特に危険だという訳ではありません。しかし、ここ数年寄せられるようになったこの種の被害を見ると、カード会社の防犯対策よりも犯罪者の手口の方が勝っているようです。国際キャッシュカードのサービス自体は優れていますから、今後もさらに普及し、防犯システムも改善されていくでしょうが、それに応じて、犯罪手口も一層手の込んだものになっていくのが世の常です。

## 2. 連係プレーの列車内泥棒

最近世界各国の列車での旅風景を紹介するテレビ番組も増えています。個人旅行をされる方々にとって、時間と空間が満喫できる列車の旅は確かに魅力的なものですが、一方で、列車という特殊な環境を利用した犯罪にも注意しなければなりません。



『ベルギーからオランダに向かう列車に一人で乗っていた日本人旅行者Aさん。Aさんが一人で座っていると、一人の男性がAさんの向かい側に座ってきた。しばらくして、その男性はAさんの目の前で携帯電話をかけ始めた。次の駅でその男性は降りたが、Aさんが男性の座っていた席に目をやると、先ほど男性が使っていた携帯電話が置きっぱなしになっていた。Aさんは、急いで男性に渡してやろうと、その携帯電話を手にとって、男性を追いかけた。何とか、男性に手渡すことができ、ホッとして席に帰ってきたAさん。そこで、自分の手荷物がなくなっていることに気が付いた。』



『イタリア国内を列車で移動中の日本人旅行者Bさん。ミラノの駅に停車中、一人の外国人が窓の外からしきりに窓をたたき、Bさんに何かを伝えようとしていた。Bさんは、その外国人の言動を読みとろうと、窓側に視線を釘付けにしていた。しばらくして、その外国人は何事もなかったかのように、Bさんの視界から消えていった。Bさんは、何がおこったのか意味がわからないまま、もとの座席に視線を移すと、自分の荷物が盗まれていた。』

犯罪手口は、日進月歩です。犯罪者は常に新たな手口を開発し、その成功事例が各地の犯罪者に伝わり、普及していくものです。特に列車内での犯罪は、実に巧妙な手口が次から次へと生まれ、その度に多くの日本人渡航者が煮え湯を飲まされています。

ここに挙げた事例も、列車という乗り物の特徴を利用した手口ですが、いずれも実行犯とは別にターゲットの注意を引く役が存在し、互いがタイミングを図りながら、連携プレーで犯罪を実行するという共通点があります。しかも、気が付いたときは、犯人はもうその列車にいないという場合がほとんどですから困ったものです。

### 3．強盗犯には抵抗しない

旅行者をターゲットとした強盗は、比較的治安が良いとされている地域でも発生しています。強盗に遭遇した場合、抵抗しないことが重要です。以下は、犯人に抵抗したため

怪我を負わされた事例です。

『フランスを旅行中、強盗に背後から突然襲われた女性Aさん。抵抗したため歩道に転倒し、頭部に重傷を負った。直ちに救急車で病院に運ばれたが意識不明の重体。』



『タイを旅行中、夜間、街を歩いていたところ、3人組の現地人に取り囲まれた男性Bさん。金品を要求されたが拒否したため、サバイバルナイフで腹部2カ所を刺され、意識を失った。翌朝ジョギングをしていた人に助けられて入院。』

『オーストラリア旅行中、2人組の男にデジタルカメラを狙われたCさん夫妻。ご主人は抵抗したため顔面を3回殴打され、デジタルカメラを奪われた。』

『イランを旅行中、バイク強盗の被害にあった男性Dさん。背後から迫った2人組のバイク強盗犯にバッグをつかみ取られそうになり、バッグを取られまいと抵抗したところ、犯人の1人がバイクから転落。逆上した犯人にナイフで大腿部を刺されて入院。』

なかには、『2人組の男に鞆を強奪されそうになったので叫び声を上げて逃げたところ、犯人は何も取らずに逃走した。』という幸運な例もありますが、逆に、犯人に抵抗したため逆上した犯人に発砲され、命を失ってしまった旅行者もいます。

被害に遭った金品などは、加入している保険会社から補てんを受けることができますが、自分の命を取り返すことはできません。幸いにして命を取りとめても、一生後遺症に苦しめられる障害を負った方もいます。

こういった強盗事件への対策として、現地の治安状況をあらかじめ確認し、危険な場所には近づかない、夜間は出歩かない等の対策を講じることはもちろんですが、不幸にして強盗に遭遇してしまった場合には、絶対に抵抗せず、犯人を逆上させないことを第一に心掛け、犯人の要求に従ってください。命あっての物種です。

#### 4. 置き引きにご用心

海外では毎年多くの旅行者が置き引き被害に遭っています。置き引きは旅行者のちょっとした気のゆるみにつけ込んだ卑劣な犯罪です。今回は特にレストランやファーストフード店で発生する置き引き被害例を幾つご紹介します。

旅先での美味しい食事は旅する者の心を和ませてくれると同時に緊張の糸をもゆるめまします。置き引き犯は、食事中に観光の話題で盛り上がる、あるいは通りがかりの見知らぬ人を安易に信用する旅行者のこのような心隙を突いてくるのです。

『西欧のある街の由緒あるホテルで友達数人と一緒にビュッフェ・スタイルの夕食をとっていた女性Aさん。隣の友達に「バッグを見ていてね」と声をかけてデザートをと

りに行き席に戻ると、バッグが消えていた。』

『北米のある都市の三つ星レストランで朝食をとっていた女性Bさん。見知らぬ男が彼女の着ていたジャケットにコーヒーをこぼし、謝りつつコーヒーを拭おうとしたので、彼女はジャケットを脱ぎ、肩に掛けていたポシェットも椅子の上に置いた。コーヒーを拭ったその男が立ち去ると、ポシェットも消えていた。』

『東南アジアのある街のアイスクリーム屋でアイスクリームを食べていた男性Cさん。見知らぬ女から「あなたの足元にお金を落とした」と言われたので、彼は椅子から立ち上がりお金を拾ってあげた。その女が立ち去ると、背もたれに掛けてあったリュックも消えていた。』

『北米のある港街のテラス式レストランで海鮮料理を食べていた男性Dさん。通りがかりの見知らぬ老人に道を聞かれたので、身を乗り出して地図を指し示しつつ教えた。その老人が立ち去ると、テーブルの脇に置いてあったバッグも消えていた。』

『南欧のある街のスタンドバーでハンバーグをほおぼっていた男性Eさん。親切そうな若者が身振り手振りで話しかけてきたので、ついつい話し込んだ。その若者が立ち去ると、手元にあったセカンドバッグも消えていた。』

この様な置き引き被害に遭わないためには、食事中でもバッグ等は絶対に体から離さない、高級そうなレストランでも決して油断しない、見知らぬ人を安易に信用しない、ことが肝要です。